

第9回

個人部門 優秀賞

「私の夢」

学校法人不知火学園 誠修高等学校3年

田中 葵さん

私の夢は、信頼される看護師になることである。それは母のように「どんな患者にも声をかけられ、親しくされる人」である。そうなるために、患者の感情や考えに対して、同じ気持ちで接していきたい。

母は、ある病院の整形外科で働いている。私はバレーボールをしているため、怪我をすることが多く、何度もその病院へ行った。そこでの母は、いつも家で見るより輝いて見える。母は、看護師という仕事に誇りを持ち、悩み事や不安などを笑顔に変え、患者の心を和ませている。そんな母の姿を見続けてきて、いつしか看護師になることを夢見るようになった。家事と仕事を両立し、病院でも嫌な顔一つせず働いている母を尊敬している。

先日、私はバレーボールで右手首を骨折した。母は病院で、ギプスを私の手首の形に固定し、包帯を巻いてくれた。そして、家ではお風呂に一緒に入ったり、食事も簡単に食べられるくらいの大きさにしてくれたり気遣ってくれていた。そこでは、「看護師としての母」が感じられた。チームメイトと練習ができず先へ進めない私の焦りや、不安が少しずつ消えていき、早く治って、またコートに立つことが大切だと思えるようになり、母への感謝が募った。このとき母は、私の気持ちになつて、怪我をしたときの心まで治してくれたのだ。

そんな母と私は毎日の出来事を話す。人間関係の難しさなどを私に教えてくれる。病院には、さまざまな考えを持つ

患者が来る。特に整形外科への来院者は、幅広いスポーツをしている患者がほとんどだ。運動をする者にとって、私の経験からすると、怪我をしたこともだが怪我で練習が出来なくなるのが一番辛い。

医師は治療にあたり、最善の回復に向けて挑む。ここでは、適切な治療行為だけにとどまらず、患者の心のケアをすることも看護師に求められている。看護師は医師と患者の間に立ち、医師からの指示を受け患者の看護にあたり、なおかつ患者の気持ちを聞き、それを医師に伝える。看護師がいてこそ、医療行為は、「人間同士の血が通うもの」になる。医師と看護師と患者が、心を開きあつてコミュニケーションをとることによって連係プレーが生まれ、治療が進む。時には命を助けるために、互いにつながり合い、気持ちや病状などを伝えようと一生懸命に話す。私もそういった医療活動の一端を担いたい。

母の話を聞くと、難しいことや辛いことばかりではないことに気づく。時々、母と買い物に行くと、病院の患者が声をかけてくださることがある。職場から離れた場所でも信頼関係は生まれると母は言う。そんな母をまた私は尊敬するのである。

私は将来、看護師として病院に勤め、何が必要かを冷静に判断し、感情のコントロールを覚え、的確に仕事をこなすようになりたい。決して、楽な道ではないが、社会に貢献できる遣り甲斐のある仕事なのである。そして、いずれは母と同じ病院で一緒に働き、母の働きをより身近に見て、母と気持ちを分け合つて学び続けたい。患者が病院で疑問や不安を感じたら、母は患者に納得がいくまで説明していた。私も母のように、人の痛みや

苦しみを自分のもののように感じる看護師になりたい。患者の気持ちを理解し、共感でき、一緒に泣いたり、笑ったりする、人生経験を積み重ねた心豊かな看護師になりたいのだ。

現在は、患者自らが医師や看護師からしつかり症状を聞き、患者自身が自分の治療方法について選択していく時代である。そういう時代だからこそ、患者と共感でき、信頼される母のような看護師になるよう夢を実現していきたい。

個人部門 優秀賞

「本物の森を作りたい」

国立東京大学教育学部附属中等教育学校4年

岡部 憲和さん

僕は今まで2年間、環境問題を勉強してきました。その結果、地球環境を守るために僕が到達した結論は、できるだけ多くの木を植えて、二酸化炭素を吸ってもらおうという方法でした。そこで、僕は、中学生時代に2回、植樹活動をしました。実際に木を植えると、達成感があり、うれしかったのですが、たった10数本の植樹では、あまりに数が少ないような気がしていました。

高校生になり、その疑問を解くため、東京農業大学を訪れました。地球環境分野のノーベル賞といわれる「ブルー・プラネット賞」を日本人で初めて受賞された、宮脇昭先生の特別講義があったからです。僕は、大学院生の中でたった一人の高校生として、先生に、本物の植樹について、質問をぶつけるつもりでした。そしていよいよ先生の講義が始まりました。

「私は、木を植える活動を行っています。海外を合わせれば、もう3000万

本も木を植えたでしょうか」という先生のお話を聞いて、すごい人に挑もうとしている自分が怖くなりました。3000本ではない3000万本の植樹。僕は、その数に圧倒されました。

「私は、海外でもどこでも木を植えます。その時、植える木は自分で選びます。本来、植樹される木は、本物の木でなければならぬからです。私は、本物の木を知っています。本物の木とは、その土地に古くから植わっていた木のことを指します。日本では、椎や樫がそれにあたります。これらの木が植わっていない森は、偽物の森と呼んでも良い」僕は、さらに、自分の耳を疑いました。木に本物と偽物がある。森にも本物と偽物がある。そこに、阪神淡路大震災の時の写真と、新潟中越地震の写真が映し出されました。

「見て分かるように、多くの木が倒されています。しかし、倒れていない木もあります。この、倒れていない木こそ、本来その土地に合っている木なのです。その土地本来の木は、地震でも倒れることなく、力強く根を張ります。決して倒れない、そんな強い木を、私は植樹しているのです」。僕は本物の木を知りたくなりました。そのような木を見つける技を、宮脇先生から盗みたいと思いました。「木があるところなら、どんなところでも、森は、復活するんです。私は、これからも本来の木の話をしていくとともに、あと30年は、木を植えていきます」と最後にそうおっしゃって、大きな拍手とともに、先生の特別講義は終わりました。僕は、先生に負けずに木を植えたいと思いました。強く強くそう思いました。

僕は知りました。植樹で大切なのは、植える本数と木の種類だということ。

そして、本物の植樹には、土地調べから始め、その地にあった木を選ぶことが必須であり、そうすれば、木は、力強くその地に根付くということ。

しかし、僕はまだ、その土地本来の木を選ぶことができません。そこに行き着く研究の仕方も知らなければ、地球上の様々な土地について知識もないからです。そこで、僕は、大学に入るまでの3年間を、修業の時間にすることに決めました。長年、木と共に生活している人たち、木の植え方から育て方まで、すべてを習うことにしたのです。平成19年の10月、僕は、北海道在住の営林署勤務の経験のある、木の職人に話を伺いに行きます。そして、11月からは、千葉県市原市の山林で、森の仲間と共に森作りの活動を始めます。そうして、この間に、僕は頭ではなく実際の体験を通して技術を磨こうと決めています。

今年、僕の活動は始まります。高校生の間に木を植え育てる技術を身につけ、大学生になったら実際に本物の森を作る。僕の挑戦は、今、始まります。

個人部門 審査委員特別賞

「誰もが輝く社会を目指して」

福岡県立八幡高等学校2年

岩田 結香さん

近年、国民の間に様々な格差が生まれ、それが拡大しているという指摘がさかんになされている。こうした格差は、なぜ生まれたのだろうか。

階級意識の強い欧米諸国や、古来の身分制度が現在も続くインドなどと異なり、戦後の日本の社会では、平等、つまり横ならびの意識が強かった。1960～70年代では、国民の実に9割までが自分の生活レベルは中流であると考えており、「一億総中流社会」という言葉まで生まれる。だが、90年代はじめにバブル経済が終わりを告げて以降「格差社会」「勝ち組」「負け組」「不平等社会」といった言葉がメディアをにぎわすようになった。これは、すなわち中流意識の崩壊を意味する。

賃金や資産の格差は、言い換えれば競争の結果である。資本主義を掲げる日本の社会に多少の経済的格差はあつて当然であり、そもそも格差を完全になくすることは不可能だ。

ここで、経済的格差の一切ない社会を想像してみる。教育も生活も、あらゆることのレベルが同じなのだから、焦りや嫉妬といったマイナスの感情とは無縁でいられるのだろうか。だが、これは裏返せば、熱心さやひたむきさが報われない社会だとも言える。同じ商品を百個販売した人と一個販売した人の報酬が同じなら、人々のやる気は削がれる方向に進むだろう。それに伴い、国家としてのエネルギーは低下し、やがて国民全体が貧しさに喘ぐことになる。

これまでの日本は、平等感や横ならび意識が重んじられてきたが、国際競争力

を高め、人々の活力を維持するためには、ある程度の格差を認め、その上で進んでいく考え方を受け入れざるを得ないのではないだろうか。

問題なのは、当事者たちがその格差を挽回できない状態にあるという点である。最近、就職率が徐々に回復してきているとはいえ、いまだに就職機会に恵まれない人がいるのも事実だ。このまま正規雇用や就業の機会に恵まれないまま年齢を重ねていくと、どうなるだろう。収入が十分でないために、結婚して家庭を築くことは、まず難しい。また、結婚したとしても、子供の養育費をわずかな収入でまかなうのは困難である。

したがって、子供が進学し、高等教育を受ける機会を得るのは、ほぼ無理に等しい。となると、その子供が高い賃金を得られるような職に就くことは不可能である。そのような職業には高い知識が求められるため、高学歴者の中から採用されることが多いからだ。

つまり、非正規雇用者の家庭では、その子もまた正規雇用のレールに乗れない可能性が高い。このままの状態が続けば、経済的な格差が世代をまたいで固定化し、再生産され続けてしまう恐れがあるのである。どれほど働く意欲があろうと、その機会が無ければ、格差はますます拡大していく。経済的な格差は、雇用や能力開発の「機会」をめぐる格差にも起因するのだ。

格差には、良い面も悪い面もある。努力したものに理不尽、あるいは不合理な思いを抱かせる社会は危険だ。しかし格差によって、低所得層が無気力や絶望感を抱くような社会であつてもならない。格差へのくやしき気持ちをバネに換えて、誰もが頑張るチャンスを均等に与えられる社会こそ理想だと、私は考える。

グループ部門 最優秀賞

「微力は無力ではない

〜私たちの環境問題〜」

山口県立厚狭高等学校 1年

池田 舞さん 田中 美帆さん

勝原 加奈子さん

○はじめに

今年（平成19年）の夏は特別暑かった。どんなに鈍感な人でも何かがおかしいと気付いたはずだ。8月16日、埼玉県熊谷市で40・9度を記録し、1933年に山形市で記録された40・8度の最高気温を74年ぶりに更新した。この異常な暑さは日本各地にさまざまな被害をもたらした。山口県でも、今夏、スポーツ中に熱中症で四人が倒れたという出来事があった。日本各地で熱中症による被害が報告されている。

世界に目を向けてみると、北極の氷が解け、北極海の海氷面積は今年の夏に観測史上最小を記録した他、アメリカでは大型ハリケーンが多発するなど、今年の猛暑は、地球全体にダメージを与えた。この暑さの主な原因は、日本列島の東南海上の太平洋高気圧が絶え間なく暖気を送り込んでいたということ、梅雨明けから太平洋高気圧が勢いを増したということ、それに「フェーン現象」や「ヒートアイランド現象」などが加わったことである。

しかし、この原因の背景には私たち人間が欲望を追求し続けた結果である環境破壊の問題、特に地球温暖化が大きく関わっているのだ。そして、今やそれは、全世界的に解決せねばならない緊急問題であり、京都議定書をはじめとして、世界規模でCO2削減などのあらゆる努力が行われ、様々な取り組みが提唱されている。

このような中、私たち高校生は、この全人類的緊急課題を自分たちの問題として切実に捉えているだろうか。環境問題は、高校生の私たちこそ真剣に考えなくてはならないのである。年齢が低いほど、将来、環境問題の直接の影響を受けることになる可能性が高いのだ。私たち高校生は、未来を担う世代の代表としてこの問題に取り組むべきなのである。今回、私たち新聞部は環境問題を自分たち高校生の問題と捉え、考察し、皆に問題提起したいと考えた。

○私達16歳の未来は？

今、私たちは16歳。現在、地球は深刻な問題をいくつもかかえている。温暖化、砂漠化、森林破壊、水質汚濁、酸性雨・・・。そしてすでに、温暖化は地球を蝕んでいる。このまま温暖化が進んでしまうと、私たちの未来はどのように変わってしまうのだろうか。

ある資料によりこのまま環境破壊が続いた場合の私たちの未来ひとつの形を考えてみた。

13年後の2020年代。私たちは29歳になる。このとき気温は、0・5度〜1・2度上昇している。地球は、数億人が水不足の被害を受け、サンゴ礁の白化現象が拡大し、生き物の生息域が変化し、森林火災の危険性が増す。洪水と暴風雨が増え、熱波、洪水、干ばつにより、人々は病気になったり、死亡してしまう確率が高くなる。

43年後の2050年代。59歳になつている。気温が1・3度まで上昇する。このころにはもう最大30%の生物が絶滅し、ほとんどのサンゴ礁は白化し、低緯度地域でいくつかの穀物の生産が減少する、アマゾンの地下水が70%以上減る、73年後の2080年代には、

気温が1・5～5・3度まで上昇する。

2～3度以上あがったときに89歳になった私たちの目の前に広がる世界は、広範囲でサンゴ礁が死滅、毎年数百万人ずつ、洪水に会う人が増え、病気になる人が増え、病院が足りなくなる。3・5度以上あがったときには、地球のいたるところで、たくさん生き物が絶滅し、低緯度地域で、すべての穀物の生産量が減ってしまう。地球は変わり果てた姿になり、私たちの未来は暗澹たるものになるのである。

○厚狭高生と環境問題

熱いからエアコンをつける。昼間でも、少し暗ければ電気をつける。暇だからテレビを見る。喉が渴いたからペットボトルを購入して飲む。そんなことが当たり前と考えている私たち現代人が、地球環境を悪化させてしまったのだ。最近では、テレビや新聞でも環境問題を取り上げることが多くなった。そんな中で「小さなことから始めよう！」というフレーズや取り組みをよく聞く。一方で「自分ひとりが何をしてもたいした影響はない」「そんな微々たることで、どうにもならないのではないか」という声も聞く。しかし、私たちは諦めたくない。人間の叡智を信じたい。今の自分の生活のほんの一部を変えるだけでも、二酸化炭素削減へとつながるのは事実なのだ。「ほんの一部」が集まれば、大きな力となる。そこで、私たちは、解決の糸口を求めて、現在の厚狭高生の環境問題にかかわる生活の様子についてアンケート調査を行い、環境問題への意識を考察した。

「シャワーの時間を短くするなど節水の努力をしているか」という調査では、YES33%、NO%67%という結果であった。多くの厚狭高生が、あまり節

水を意識していないように思われる。日本は水資源に恵まれている。そのため水のありがたさを意識せず、必要以上に使ってしまう面があるように思う。炊事、洗濯、トイレ、シャワー。どれも生活するためにには欠かせない事だ。しかし、水を使うのにも二酸化炭素を排出する。蛇口から水を流す時も、温かいお湯を沸かす時も、みな二酸化炭素を排出しているのだ。

今年、第13回国際交流会議「アジアの未来」で日本は、温暖化ガスの削減に向けた総合戦略を発表した。2050年までに温室効果ガスを半減するという目標を明示した。これを達成するには、1人1日1キロ削減する必要がある。そのため政府が提案した家庭での二酸化炭素削減のアイデアの中に「シャワーを1日1分減らす。」というアイデアがある。シャワーを1日に1分減らすだけで、二酸化炭素が74グラム削減される。

「学校や部活にマイ水筒を持ってきているか」にはYES88%で、NO12%という結果であった。関連して、「学校で弁当を食べるときマイ箸を持ってきているか」には、YES96%、NO4%となった。ごみを出さないことや、資源を大切にするという意識は厚狭高生は自然に身につけているように思われる。

現在の日本のごみ問題は、大きく分けて二つある。ひとつは家庭から排出される一般廃棄物と工場から排出される産業廃棄物の増加により、年間のごみの排出量が増加傾向にあること。もうひとつは有害物質を含む有害廃棄物の取り扱いについてである。現在、法制度も整えられ、リサイクル活動が積極的に推進されている。また、マイバッグ持参の呼びかけなどもされ、ごみの削減が進められ

ている。

スーパーやコンビニで使用されているレジ袋は、1人あたり、年間約300枚になるといわれている。また、レジ袋1枚製造するのに、約20ミリリットルの原油が必要だ。もし、レジ袋を使わずにエコバッグを使うと、年間で6リットル（1人当たり）削減できるというデータもある。

「テレビをなるべく見ないようにしているか」という質問には、YES15%で、NO85%という結果であった。確かに、テレビを見ないということは高校生には難しいことである。しかし、テレビを見る時間を短くすることはできる。また、勉強、読書などに没頭して、テレビの存在を忘れるという方法もある。高校生らしい生活を送るためには、テレビを遠ざけるのはひとつの方法であり、それがエコに繋がれば一石二鳥だ。

電気の使用は直接的に二酸化炭素の排出につながる。特に火力発電による影響は大きい。水と同様、電気も生活に欠かせない資源である。しかし、テレビの主電源を切り、長時間使わない時はコンセントから抜くというささいなことで、64グラムの二酸化炭素が削減できる。また身近な家電製品（エアコン・冷蔵庫・照明）をエコ製品に買い替えると281グラムの二酸化炭素が削減できる。

以上見てきたように、厚狭高生のアンケート調査では、身近なことから、少しずつ環境保全を実践している様子もわがわかれる。割り箸を使わない、ペットボトルを安易に利用しない、更に、なるべく公共交通機関を利用し登校する努力を意識して行っているという結果も出ている。わざわざ難しい取り組みはしていないが、普通の高校生活に環境への

ひと工夫をするという生活が環境保護へとつながるのである。

微力は無力ではない

私たちは、今回アンケート調査結果で気づいたことを厚狭高生に伝えようと、地球温暖化問題の特集した新聞を発行した。そして、私たち新聞部と生徒会で協力して10月1日から9日まで「環境にやさしい1週間を過ごそう」と提案し、厚狭高生全員で取り組んだ。各教室や校内の掲示板にポスターを貼り、昼休みに放送で呼びかけた。

私たちの提案は「シャワーの時間を短くしよう」「テレビを見る時間を減らそう」「ペットボトルを1本でも節約しよう」などという高校生の誰にもできる身近な取り組みである。1週間が終了し、再び全校生に取り組み状況をアンケート調査した。

ペットボトルの節約はよくできたかYES44%、だいたいできた42%、NO14%という結果をはじめとしての取り組みにも厚狭高生の積極的なエコ生活の1週間が感じられた。その他心がけたことは？という問いにも「コンビニで袋をもらわなかった」「ティッシュの量をいつもの1/5にした」などの積極的な姿勢の見られる回答があった。これらの努力は微力に見える。

しかし、このようなことを一人ひとりが1週間続け、更に1ヶ月、1年と続けていけば、環境保護への大きな力になるはずだ。人間一人ひとりには微力であっても決して無力ではないのだ。幸いなことに、私たち高校生には、まだまだ長い時間がある。私たちが、未来に向けて長期にわたり根気よく取り組みれば、その成果は大きいにちがいない。

グループ部門 優秀賞

「学校週5日制について考える」

鹿児島県立指宿高等学校 3年

村中みなみさん 今村有希さん

野元香緒里さん 山下龍星さん

福元由美子さん

(一) はじめに

日本の学校週5日制は、「日本人は働き過ぎである」という世界各国からの声を受け、国際労働機関の労働時間を年間1800時間にする条約に批准したことに始まった。これに伴い、公立小・中学校及び高等学校の多くで1992年9月から毎月第2土曜日が、1995年4月からは毎月第2・第4土曜日が休業日となったのである。

そして、学習指導要領の改訂に合わせ、2000年4月からは毎週土曜日が休業日になって完全な学校週5日制が実現した。さらに「学校教育法施行規則」を改訂し、公立学校に対しては法的拘束力を持たせた。学校週5日制が完全に実施されたことよって、指導内容が従来よりも大幅にカットされ、さらには新しい学力観への切り替えが進められた。それによつて教育現場では多くの試行錯誤があつたようである。これまでの過熱化した受験競争による詰め込み型の受験教育はタブー視され、ゆとりのある「心の教育」が推進された。学校週5日制によつて学校や家庭、地域社会の役割は明確になり、それぞれが協力して社会体験や自然体験などの様々な活動の機会を子どもたちに提供し、自ら学び自ら考える力や豊かな人間性などの「生きる力」を育むことをねらいとする活動が増加したことは評価できよう。

しかし、知識・理解重視の学力観から

興味・関心・意欲を育てるための体験活動重視になったことが、今日問題とされている「学力低下」の一因であるとも言われている。

(二) 学校週5日制の成果と問題点

義務教育が学校週5日制になったことによる影響は、親や子どもなど個人によつてさまざまである。中でも小学校の学校週5日制による影響は、他に比べて比較的大きかったと言えよう。

まず、土曜日が休日になったことで塾や習い事をする子どもが増加した。これは、学校週5日制に伴い、学習指導要領の内容の3割が削減されてしまったので、親がわが子の学力低下を懸念した結果であろう。子どもの将来を考えて、少しでも学力を落とさせたくないという親の配慮であるといえる。

また、家族で過ごす時間について考えてみると、土曜が休みになったことにより家族で過ごす時間は増え、家族揃って食事をしたり親子間での会話が增えたりなどコミュニケーションにおいてプラスに働いた家族も確かに増加しただろう。しかし、親の仕事によつては、土日こそ忙しく、子どもたちが放置されたことも認識するべきであろう。

また、学校週5日制はテレビやビデオを観たり、ゲームをする時間の増加をもたらした。テレビにも教育番組などがあるが、大半は趣味、もしくは暇つぶしであり、その傾向は特に男の子に多いようである。更に、テレビ・ビデオの視聴時間は学習時間や学校の成績にも相関性があり、1日に3時間以上観ている子どもの成績は、そうでない子どもに比べ全体的に劣っているという結果も出てくる。

このことから、学校週5日制は場合

によっては悪影響を与えることになったのである。当初の思惑を予想以上に裏切るものとなったこの学校週5日制という制度を一体これからどうすれば良いのだろうか。

(三) 私たちの考える「学校週5日制」

私たちの通う指宿高校で各学年2クラスずつ次のようなアンケートをとった。

質問項目は①週5日制が廃止されたらどう思うか②小学生の頃、土曜日に何をしていたか③土曜日が休みという理由で家族と過ごす時間が確保できたか④小学生の保護者になった場合、週5日制は廃止・あるいは継続どちらがよいかである。

①では、週5日制に慣れたせいか「どちらかといえば、よくない」「よくない」という回答が多かった。②③では全体の半分以上が「外で遊ぶ」と回答し、以下「運動(スポーツ少年団など)」「そして「家で過ごす」と続いた。また、大半の人が土曜日に家族との時間を確保できていたと回答した。

最後に④では様々な意見が出てきた。廃止すべきと答えた人は38%、継続すべきと答えた人は62%だったが、高校生の私たちが「保護者」という立場に立った場合、廃止すべき・継続すべきの両論、その理由もいろいろあった。

まず「廃止すべき」で最も多かった理由が「学力低下」に関するものだった。学力低下を止めるために家でだらだら過ごすよりは学校で勉強をし、基礎学力を身につけた方がよいという意見である。女性の社会進出によってさらに、保護者が仕事で家にいないケースが増えていくのなら学校にいた方が安全であるという意見もあった。一方「継続すべ

き」の理由では、小学生なので週5日制で十分だし、休みである事で勉強よりも大切な事を学べるし、何より家族・自分のそれぞれの時間を作る事ができるので、遊びも含めて好きな事をしてほしいという意見が多かった。

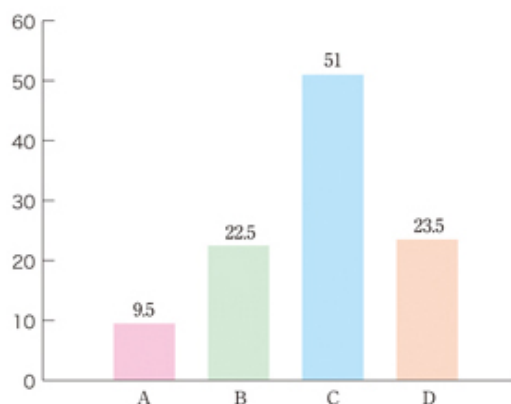
ただ、このアンケートから私たちは現在、土曜日の午前授業が戻るということになるかと反対だが自分が親になった時、つまり保護者という立場に立つと賛成も増えてくるという特徴を知ることができた。子どもには学力低下をまぬがれたいと思っている人が多いということなのだろうか。

(四) 学校週5日制と地域格差

大手教育関連企業ベネッセのデータによると、都会の子どもたちの「土日の過ごし方」は、私たちの暮らす地方とは、大きな違いがあることがうかがえる。前節でも述べたように、私たちの通う指宿高校では、「外で遊ぶ」が一番多いのに対し、東京都内は「塾」通いの生徒が多い。前述したように、学力低下を心配する親の意志が強く働いているようである。学校週5日制によって学習指導要領の3割が削減されたことから、学力低下への対策がとれる地域は全国でも限られている。その上、塾に通うには相応の教育費が発生し、親の所得格差がそのまま教育機会の格差へとつながっていく。

指宿高校生の多くは、小学生時代に「外で遊ぶ」等という、のどかな土日を過ごしてきた。そして、私たちがこれまで経験してきたことは、少なくとも東京都内の子どもたちよりも「学校週5日制」や「ゆとり教育」の理念に則ったことである。「小さい頃には勉強よりも大切な事を学ばせたい」という理想的な言葉が、

①現在学校週5日制ですが、もしも土曜日が昔(午前授業)のように戻るとしたら、あなたはどのように思いますか？



A よい
B どちらかといえば、よい
C どちらかといえば、よくない
D よくない

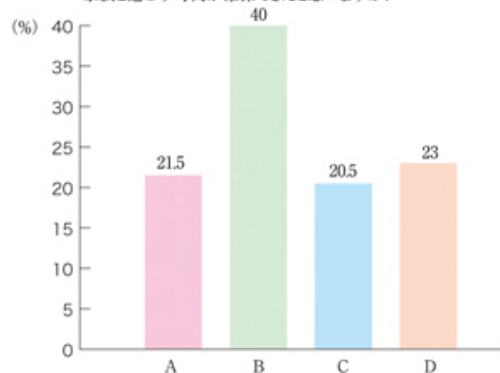
■資料／アンケートの結果

今や空疎な響きにしか聞こえない。それを裏付けるのが、アンケート④の結果である。高校生になって社会の構造を知り、美しい部分や醜い部分もそれなりに理解し、各自の夢が現実的な路線になった時に、これまで受けてきた教育への疑問とともに自分のかわいい子どもには、そうであっては困るという思いが、データに示されているのではないかと思う。奇しくも、この論文を作成している課程で中教審は、「ゆとり路線」を見直し、その具体的な内容が新聞・テレビ等で報道されている。将来の私たちを、明るい光は照らしてくれるのだろうか。

④あなたが小学生の保護者だったら、学校週5日制は廃止or継続どちらがいいですか？理由も添えてお書きください。

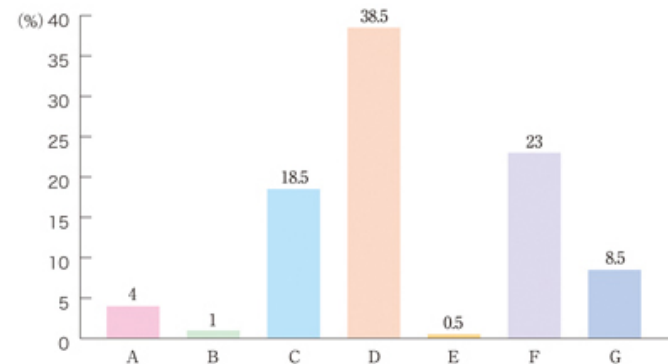


③小学生の頃の事を聞きます。「土曜日が休みだから」という理由で家族と過ごす時間が確保できたと思いますか？



A そう思う、家族と過ごす時間を確保できていたほうだ
B どちらかといえば、家族との時間を確保できていたほうだ
C どちらかといえば、家族との時間は確保されなかったほうだ
D そうは思わない、家族と過ごす時間は確保されなかった

②小学生の頃の事を聞きます。土曜日に何をしていましたか？最もよくあてはまるものを選んでください。



A ゲーム
B 家の手伝い
C 家で過ごす(A・Bに該当しない)
D 外で遊ぶ
E ボランティア活動
F 運動(スポーツ少年団など)
G 習い事(習字、ピアノ、そろばんなど)

グループ部門 審査委員特別賞

「世界の人権」

福岡県立久留米高等学校 3年

田島彩子さん 高田成美さん

竹田結希さん 安岡卓哉さん

平成18年の7月、ドイツで行われた2006 FIFAワールドカップ決勝戦のイタリア対フランスにおいて、フランス代表のジネディーヌ・ジダンが、イタリア代表のマルコ・マテラッツィに対して頭突きをしたことにより退場となったことは記憶に新しい。原因ははっきりとはわかっていないが、マテラッツィがジダンに対して侮辱発言をしたことによるものと言われている。さらに、その背景には、ジダン自身に対する人種差別があるのではないのかとの報道もなされた。

私たちは、現在も世界に差別が多く存在しているのではないかと考え、調査することにした。そこで、典型的なモデルとしてさまざまな人種が共存しているアメリカに目を向けた。

21世紀に入り、現在のアメリカでは、多くの人々が、スポーツ界や芸能界、そして政界などでも、人種に関係なく活躍している。これは、今までに行われてきた人種差別への反対運動などの成果だろうと私たちは考える。しかし、そのようなアメリカでも人種差別が続いているという一面がある。

その差別の中にヘイトクライムというものがある。これは、ある人種、民族、宗教など異なる集団に対する偏見・差別・蔑視感情などが元で起こる犯罪行為、特に暴力犯罪を指す。これに関する事件は、年間約7000件以上がすでに報告されている。例をあげると、911テロに関する犯罪などがある。

911のイスラム原理主義者による

テロと、一般のアラブ系アメリカ人は全く無関係だが、ただイスラム教信者であるとの理由だけで多くの犯罪が発生している。

近年、このヘイトクライムに対抗するために多くの規制が出来上がっている。一般の犯罪よりヘイトクライムへの処罰を重くしたり、女性への暴力に対する法律を整備したりするといった対策を行っている。

また他にも、米国のほとんどの殺人事件は加害者と被害者が同じ人種間でおきているが、1977年の死刑執行再開後の事例では、死刑囚の割合のうち、白人を殺した黒人が31%であるのに対して、黒人を殺した白人は、1.5%に過ぎない。このような裁判制度の不公平性も問題となっている。

さらに、2000年には、ブッシュ現大統領の選挙区において、アフリカ系アメリカ人住民の投票権が不当に剥奪され、約5万人が不当に選挙権を奪われたという事件まで起きている。これらの問題も含め、現在でもアメリカの人種差別問題は残っているのだ。

では、アメリカにおける人種差別が始まったのは、一体いつからなのだろうか。1441年ポルトガルのエンリケ王子が二人の船長を派遣した。彼らが上陸したのはアフリカ大陸であり、原住民を奴隷としてポルトガルに連れて帰った。

これが奴隷貿易の始まりであり、黒人に対する人種差別の始まりである。エンリケ航海王子はこの奴隷貿易の成功により、今まで以上に価値のある、砂金、象牙、砂糖、動物の皮、マラゲッタ・ペッパーという胡椒をアフリカの奴隷により得ることができたのだ。財政が安定したことにより、探検を組織立って進めることもでき、長期的な計画を立てられる

ことになった。

その後も奴隷制度は広がっていき、黒人は奴隷として売買の対象となったのだ。

アメリカで奴隷貿易が盛んに行われたのは、18世紀のころである。その間、1400万人以上のアフリカ人たちが大西洋を渡り、アメリカに連れて来られたと推測されている。

1808年にジェファアソン大統領によって奴隷貿易が禁止された後でも、アメリカ合衆国での黒人たちの奴隷としての生活状況は変わらなかった。1860年の合衆国勢調査によれば、合衆国総人口の約14%を占めた全黒人人口四、四四一、八三〇人のうちの89%である、三、九五三、七六〇人は奴隷だったと言われている。

アメリカ合衆国での人種差別との戦いは、奴隷解放宣言から始まった。これは、当時アメリカ合衆国大統領であったエイブラハム・リンカーンが南北戦争終戦間際、奴隷たちの開放を命じると宣言したものである。この宣言によって、海外諸国は奴隷制を廃止しようという米国の新しい取組みを賞賛した。

しかし、奴隷開放が宣言されたにも関わらず、アメリカ南部諸州では、依然として黒人に対する蔑視が続き、差別条例までもが作られていた。例を挙げると、就労や労働賃金の格差、学校・交通機関・食堂の隔離などがある。

当時のアメリカ社会は白人主導で、黒人を人間として扱っていなかった。学校をはじめとする公共の施設で黒人と白人が同席することは許されず、それは「分離すれども平等」すなわち、人種ごとに分離をしても、施設が同じ質を保っていれば平等である、という理念に基づいていた。しかし、実際の黒人の施設は、

白人のものとは比べ物にならないほど貧しかったのである。

バスの座席は、「白人用」と「黒人用」に分けられていた。「黒人用」は後部にわずかな座席があるだけで、仮に「白人用」が空いていても、黒人は立っていないければならなかった。また、「白人用」の座席が満席になると、黒人は席を譲らなければならなかったのである。

ある日、バスの黒人用座席の最前列に、ローザ・パークスという女性が座っていた。そこに白人が乗り込んできた。すると、運転手が黒人席を4つ空けることを命じたのである。3人の黒人は席を立ったが、彼女は「ノー」と答えた。運転手はローザに「警察に逮捕させるぞ」と脅したが、彼女は決して立とうとしなかった。そして、彼女は警察に逮捕された。この事件により、黒人たちの怒りが頂点に達した。そして、マーチン・ルーサー・キング牧師らを中心に「バス・ボイコット運動」が起きたのである。

「バスなんか、乗らなくてもいい。どうして差別される必要があるのか。」と言って、それまでバスを利用していた2万人もの黒人たちが皆、歩くようになった。なかには、家から職場まで20キロも離れている人もいた。しかし、誰もが辛抱強く、また誇り高く歩いた。彼らにとって、「歩くこと」それは、戦いの象徴だったのである。

そして、ボイコット運動が始まってから1年後、合衆国最高裁判所によって、バス車内における人種分離を違憲とする判決が出された。これからの公民権運動は、数多くの組織や個人が参加して行われたもので、運動の形態も、訴訟、街頭のデモから、レストランの座り込みに至るまで様々であった。

そして、ジョン・ケネディ政権は、南

部諸州の人権隔離法を禁止する法案を次々に成立させたのである。また、ケネディに継ぐリンドン・ジョンソン政権下では、黒人の社会的・経済的地位を向上させるため、役所や企業、大学に黒人を優先的、もしくは白人と同数採用することを義務付ける政策をとった。

以上、アメリカの自由民権運動への取り組みを見てきたが、最後に私たちの国、日本について2つの事例に触れておきたいと思う。

地球には、さまざまな人権が存在し、それにあわせてさまざまな思想、宗教、習慣などが存在するのは、当たり前のことである。異なる人種や宗教に対する受け止め方も、国ごとの観点や視点があることを理解しておかなければならない。まず、日本の宗教に対する視点を見てみたいと思う。

日本には『七福神』という神様がいます。これは、福をもたらすとして日本で信仰されている7柱の神である。この7人は、全員国や宗教の違う神様なのである。『七福神』とは、一般には恵比寿、大黒天、毘沙門天、寿老神、福祿寿、弁財天、布袋尊の7柱の神を指している。恵比寿は日本の神であり、大黒天はヒンドゥー教のシヴァの憤怒の化身、毘沙門天はインドの神話のクベーラ、寿老神は道教の神で南極老人星（カノープス）の化身、福祿寿は宋の道士南天星の化身、弁財天はヒンドゥー教の女神であるサラスヴァティー、布袋尊は中国唐末の明州に実在したとされる異形の層・布袋（ぼてい）であると言われている。つまり、私たちの国、日本は宗教の違いを排除せず受け入れる視点を持っていると言えるだろう。

また、人種差別問題については、1919年パリ講和会議で、当時の日本代表

であった西園寺公望が、国際連盟の規約に人種差別撤廃条項を加えるよう提案した事も注目に値する。白人主導の国際会議において、人種差別撤廃を明確に主張したのは、日本が最初であった。残念ながら、この提案は欧米の反対によって実現することはなかったが、世界に先駆けて訴えたことは評価されてしかるべきである。

今でも、世界中には、人種や宗教をめぐる様々な問題が残っている。それらを乗り越えて行くのは決して易しい事ではないだろう。しかし、私たちにも何か出来ることがあるのではないだろうか。西園寺公望が人種差別撤廃条項を提案したように、日本人だからこそ提起できる視点を持って国際社会に貢献してゆく道を今後も考えてゆきたい。